

# 武蔵工大だより

第20号

武蔵工大だより  
編集委員会  
東京都世田谷区玉堤1-28

(題字は山田学長)

大学教育の場.....	1
大学に関する研究委員会経過報告Ⅲ.....	2
研究業績.....	4
電算ニュース.....	5
46年度卒業予定者就職進学先内定者一覧.....	6

46年度クラブ同好会一覧.....	9
課外活動.....	10
残った「すずかけの木」達.....	11
47年度大学院、工学部入学試験要項.....	12

今から50年以上も前、私の大学生時代のことであるが、先生の中には、細かい図面を黒板に書かれ、それを学生は黙々として、時には30分位の長時間、ノートに写したことがあった。プリントにして学生に配ることがなかった訳ではないが、このようなことが、あまり問題にならなかった時代であった。わが国の産業もまた今日の隆盛から見ると、極めて規模の小さい頃のことである。大学の数も少なかったし、また学生数も極めて少ないものであった。現に私共のクラスも20人位であった。

## 大学教育の場

学長 山田良之助

今日では、周知のように、大学生の数も多くなったし、また、大学の数も、これに伴って多くなっている。同じ年輩の青年の約20%が大学生という時代になったのである。大衆化した大学といわれる時代になった訳であるが、これらの多数の大学卒業生が、それぞれ社会に出て、生活し、社会に貢献しているのである。大学教育も、教科書や、参考書が活用され、また、いろいろの教育工学的方法を活用して、教育の効率をあげるようになってきている。

今更新制大学という表現はどうかと思われるが、今日の大学の長は、一般教育と単位制度であるといわれている。私が、しばしばいうように、一般教育というのは、学生はそれらの科目を聴講して及第点をとって、単位をとるだけが一般教育の目的ではなく、学生はそれぞれの科目を修得したことにより、知識と教養をわがものとし、生活に潤いをもたらす、社会における万般の事象に対して、正しい判断を行ない得る素養を作ることを目的としている。単位の取得といっても、単に試験に合格するという形式的のものであってはならない。単位制度もすでに20年以上の経験を経て今日に至っているが、まだまだ、多くの問題を包蔵している。例えば、1時間の講義に対して2時間の学生の自学、自習を課するのが標準とされているが、これはいづくして、なかなか実行し難い。それならば、学生の自学、自習を教師の側で指導しながら行なわしめるよう、例えば2時間の自学、自習に対応する授業時数を1.5時間とか、2時間とかとする工夫があってもよいのではないか。これは

講義の範囲を拡大するために授業時数を増すのではなく、演習、質疑等を加味する方法等を採用することによって、学生の理解を深めるためにそれらの時間を使う意味である。重要な学科目ならば重点的にこのような措置をとると同時に、授業科目数を減少する方向で工夫されてよいのではないか。形式的に、単位制度といえ、授業時数が少なすぎて、十分な教育ができないという論が世上一部にあるが、それは余りにも工夫がなさすぎる論ではあるまいか。

過去2年来、各方面では大学改革についていろいろの提案があり、議論が行なわれている。中央教育審議会その他のいくつかの団体でも各種の意見が出されていて、今後、更に議論が活発になることであろうし、また、改革も行なわれるであろう。しかし、それらの提案の多くは、大学の種別、機構、管理等に重点が置かれている。これは、それなりに必要があり、意味のあることであるとするならば、その意味では価値ある提案と見られよう。しかし、ここに忘れてならないことは、教師、いや広くいえば、大学全体をあげての教育に対する熱意と、学生の強い勉学心がなければ、教育の効果はあがらないということである。本学では幸にして、これらが年とともにたかまって来ていると見られる。しかし、多数の学生の中には、勉学意欲に欠けるものがあり、教養課程、専門課程何れにも不十分な成績のものがあることは遺憾である。本学のような工学系の大学では、卒業後の就職は極めて容易である。過去においてそうであったように、今後もこの状態は続くものと見られている。従って勉学を目的として大学に入学したものが、就職のみが目的であるかのような錯覚をおこし、勉学が不十分になることがある。本学の学生諸君は既によく承知しているところであるが、本学では長い間の研究の結果、上記の単位制度のうち、授業時数にも改革を加えているし、また、ある種の学年制度を加味して、これを2年前から実行に移している。学生諸君は、大学の意のあるところをよく理解されて、勉学に励まされたいと希望を述べておく。

## 残った「すずかけの木」達

電子通信工学科 教授 田中兼義

1号館の玄関前に、大きな「すずかけの木」が、天空に向かって思い切り枝を伸ばしている。梢は10メートルを遙かに越しているだろうか、夏には大きな葉をつけて緑蔭をつくり、晩秋、落葉の後には、枝一杯の鈴なりの球果が下校時の夕空に幻想的なシルエットをかかげる。

「すずかけの木」は、街路樹によく使われ、「プラタナス」という呼び名の方が馴染み深いかもしれない。東欧、西アジアの原産で、20世紀初頭の渡来といわれている帰化植物である。

仲間も、校庭のあちこちかなり植えられている。この玄関前のものも、一見ほかの仲間と同様になんの変哲もないように見えるが、赤レンガのツリーサークルに守られた根本を注意して見ると、少々変わった育ち方をしていることに気付くであろう。

というのは、根本で二股に分かれているように見えるが、じつは、一本の幹から分かれているものではなく、別個の二本が、ごく接近して植えつけられていると見るべきであろう。「なぜ、このようなおかしい植え方をしたのだろうか。」私は、つぎのようないきさつを記憶している。

はじめて、この連中にお目にかかったのは、専門学校時代の母校に奉職した翌年、すなわち、昭和21年のことであった。終戦後食糧事情の極度に悪い時で、都内では、庭先はもちろんのこと、空襲の焼跡や、路端など、空地らしい処にはどこでも、家庭菜園と称する小さな畠が見られたものである。

当時、学校には岩崎さんという小使さん老夫婦が住みこんでおられて、ご多分に漏れず家庭菜園をやっておられたようで、この木のあたりは豌豆の畠になっていた。豌豆の栽培には、蔓を巻きつかせるために「手」が必要である。小使さんは、すでに校庭に幾本かあった「すずかけの木」の若枝に目をつけたのであろう。手頃なものを切り集めて、うねに突き差し、豌豆のために「手」を作ってやった。

だから、かなりの数の枝が、比較的せまい間隔で挿し木されたことになった。挿し木の時期は11月頃がよいといわれているが、もともと小使さんには挿し木をしようという考えなどなかった筈だから、時期が適切であったとは思われないけれども、水分の多いあの地床の条件が良かったのだろうか、私の気付いた時には、豌豆は殆んどなかったが、鉛筆ほどの太さの貧弱な幹に、分不相応に新しい葉をつけた苗木が数本、枯れた用済の「手」を尻目に生命力の強さを誇示していた。

敗戦直後の混沌たる情勢下で人生の方向転換を決行したばかりの私にとって、この姿は強烈に心打つものがあった。おばあさんにねだって、一本わけてもらい、自宅の庭に移植したが、見事に定着し、年々繁茂して、枝の整理に一苦労するようになった。

やがて、生みの親の小使さん達は学校を去り、キャンパスも少しづつ様子が変わり始めた。幾本かの仲間達は、別な場所にでも移植されたものか、いつの間にか姿を消してい

ったが、どうしたものかこの二本仕立ての木達だけは取残されたような形で居座り、ぐんぐん成長し続けていた。

数年前、1号館の建築工事が始まることになったとき、私は親愛なる「すずかけの木」達の去就に特に関心があり、内心ははらはらしながら見守っていたのである。幸運にも、工事の邪魔にならない場所にあったせいも、はたまた工事関係者の配慮によるものか、足場が取払われて気づいてみると、伐られることも移されることもなく、涼しい顔をして残っていたのである。

さらに、玄関前の舗装が始まったので、今度はいよいよ処分されるのではあるまいかと心配していたところ、すっかり仕上がったコンクリート舗装の端に、ツリーサークルまで取付けてもらって、あたかも、自分達はここの主であるとも言わんばかりの姿で、落着きはらっているではないか。

「やあ、よかったなあ」と思わず口走ってしまった。

おもえば、この「すずかけの木」達は、二十有余年の間移り行く学園の情景をじっと見守り続けて来たものである。木達が物心ついた頃、はじめてここに集った一群の学生達は、小使室のラジオで、東京裁判の法廷実況中継にじっと聞き入っていた。繰り返される「何某……death by hanging……」のアナウンスに、居並ぶ学生達の表情は複雑であった。大学になってまもなくの貧乏時代、1学級10名にも満たない学生達が、すぐ前にあった粗末な木造の化学実験室や物理実験室に嬉々として出入りしていたこと、教職員がなれない手つきで校舎の修繕をしていた様子も覚えていたことであろう。

苦節幾星霜、今や不動の地歩を占めたその足もとでは、職員の昼休みのまどいが展開され、ときにはヘルメット姿が駆け抜けた。卒業式の日には、背広姿の学生達が、この木をほぼ中心に集り、祝賀の野外パーティに杯をあげ、記念写真の背景に取り入れられていることも多い。入学式の日には、盛装の父兄が、学生と目標にでも打合わせたのであろうか、人待ち顔に佇んでいることもある。幼い頃に見たあの一群の学生達とどのように比較していることだろうか。小使さん老夫婦に代って、今では守衛さん達が馴みになって日夜お付合いをしてくれるし、身の廻りは用務員さん達が親切に面倒を見てくれる。

強風に襲われれば、美しい葉を惜しげもなく落して抵抗をさけ、成長するにつれて着衣が窮屈になれば、薄いコルク質の外皮を部分的に脱ぎすてて、独得の模様を残しながら衣替えをし、来たるべき春に備えては頑丈な冬の芽をつける。そして、根はあのコンクリート舗装の下でも充分に張っていることであろう。この生きる知恵と力の実証に私はただ敬服する次第である。

「すずかけの木」達よ、長寿健闘を祈念してやまない。



